**能登谷 太郎 （のとや・たろう）**

**１、プロフィール**

詩人。小学校教師のかたわら詩作を発表。文学的な稟質に恵まれながら、太平洋戦争時、沖縄において23歳で戦死。死後、ガリ版73ページの『能登谷太郎詩集』が発行された。

＜生没＞

1922（大正11）年３月15日 ～ 1945（昭和20）年５月３日

＜代表作＞

詩集『能登谷太郎詩集』

＜青森との関わり＞

青森市に生まれる。青森師範学校卒業後、上北郡一川目国民学校、東津軽郡浜館国民学校の教師を務める。

**２、作家解説**

大正11年３月15日、青森市浦町字野脇12番地に生まれる。父阿部捨三、母は戸田トヨ。生後間もなく両親が離婚したので、阿部家から籍を抜き、母方の祖母の手で育てられる。父は阿部幾男のペンネームで淡谷悠蔵らの「黎明」や新聞に短編小説、エッセイ、詩を発表、その反俗的な扮装は県文壇の異色的存在であった。葛西善蔵、石坂洋次郎との間に交遊はあったが15年逝去。母は離婚後上京、長谷川時雨主宰の女流文芸誌「女人芸術」に拠り短編小説を発表した。当時の文壇ゴシップ欄に「女流作家には美人が少ないが、＜女人芸術＞の矢田津世子と戸田豊子が、美人の双璧だ」とみえており、その後は牧マリの名でルポ・ライターとして「婦人公論」などで活躍したと伝えられる。

両親から文学的な素質を受けた能登谷は「六歳の頃、その老祖母の枕元でルビもついていない新聞を読み聞かせ、解読さえするような驚くべき子」であったという。昭和11年青森師範学校に入学。同期に工藤与志男がいた。16年師範学校卒業。４月上北郡一川目国民学校に赴任。文学愛好者沼館武志と交遊。17年には工藤与志男が来任、交友関係を深める。小学校高等科同期の吉田嘉志雄編集の同人雑誌「津可留」に工藤とともに参加、第３号に短歌９首 、俳句５句を発表する。17年９月東津軽郡浜館国民学校に転任。18年４月、東京府北多摩郡村山東部第78部隊に現役兵として入隊。20年５月３日、沖縄本島内間で戦死。機関砲第103大隊所属。陸軍中尉、享年23歳であった。

天稟の才が開かぬままの詩人の短い人生であった。死後、盟友の工藤与志男編集の『能登谷太郎詩集』（昭和28年）が光鋩会から発行された。詩、小説、書簡で構成された小冊子ではあるが、夭逝した詩人の全貌を知ることができる。

**３、資料紹介**

〇『能登谷太郎詩集』

図書

1953（昭和28）年11月１日

170mm×170mm

詩抄「三等詩集」（９編）、「岸で」（12編）、「わかものの歌」（７編）と小説（未完の小品）と書簡１,２,３で構成される唯一の著作である。同人仲間の工藤与志男の編集で能登谷の死後に刊行された。叔父阿部竜応（合成）の「序」が短い詩人の生きざまを浮き彫りにしている。